

# 国民とともに歩まれた 昭和天皇

## ●国民を励まされた全国巡幸

終戦から半年後の1946（昭和21）年2月19日、昭和天皇は神奈川県川崎市の工場を訪問されました。戦後復興にあたる国民を励ますために全国を回る巡幸の始まりです。

昭和天皇は終戦直後の1945年9月、日本を占領していた連合軍総司令部（GHQ）のマッカーサー最高司令官を訪ねました。このとき、「自分の身はどうなってもいい」という昭和天皇の言葉と人柄にマッカーサーは深く感動し、「全国を回りたい」という昭和天皇に賛意を示したといわれています。

巡幸は3年間の空白を挟んで1954（昭和29）年まで続き、沖縄を除く46都道府県すべてを回り終えられました。訪ねられたのは工場や農村など生産現場のほか、学校、病院などさまざまな施設です。被災地、広島では広島戦災児育成所にも立ち寄られました。

夜は普通の旅館や県庁、はては学校の教室などに泊まりながらの旅で、行く先々で熱烈な歓迎を受けました。昭和天皇は自ら多くの人々に声をかけ、国民は初めて目の当たりにする天皇の姿に感激し、復興への決意を新たにしました。

## ●沖縄への思い

昭和天皇が最後まで気にかけておられたのが、先の大戦で国内最大の地上戦となり、長くアメリカの施政下にあった沖縄への行幸（訪問）がかなわないことでした。1987（昭和62）年、ようやく行幸が決

まりましたが、翌年重い病気にかかれ、実現しませんでした。昭和天皇はこのときのお気持ちを御製（お歌）にこう詠まれました。

「思はざる 病となりぬ 沖縄をたづね果たさむ  
つとめありしを」

昭和天皇のご生涯は、大日本帝国憲法における統治権者として、戦争の時代に苦悩した前半生と、日本国憲法における象徴天皇として、国民の幸せと国家の平安を祈る後半生だったといえるでしょう。常に国民とともにあったご生涯でした。

昭和天皇の後をついだ上皇陛下も、天皇時代、全都道府県を訪ねられるとともに、阪神・淡路大震災、東日本大震災など大災害が起きるたびに、現地を何度も訪問し、被災者を励まし続けられました。  
→P.277



昭和天皇の巡幸